

Essay

Sapiarc.com

2008年10月5日 (2008-12)

ニューヨーク・タイムズを見て、聴いて、読む

このところ、世界中の目がアメリカの大統領選挙及びこの選挙とたまたま同時に起きている金融業の破綻と救済策に集まっています。これらの大きな事件をアメリカのメディア、とくにニューヨーク・タイムズのような有力紙がどのように扱っているのか、私は興味を持ちました。

私は、埼玉大学を定年で退職した2002年から後の2年間、カリフォルニア大学バークレー校の客員教授 (visiting professor) の肩書きをもらっていたので、何回も同大学に短期間滞在しました。そのとき、教授たちは、ニューヨーク・タイムズに登録しておいて、メールで送られてくる新聞を読んでいたのです。私も真似をして、新聞をメールで送ってもらっていました。このサービスは、日本の大新聞でもしていたと思います。

それから3年ほど経って、ニューヨーク・タイムズはネットで見ることができるようになり、一旦メールでの配信を止めました。それで、私は何となく同紙を読まなくなっていました。

今年の8月末から9月初めに、民主、共和両党の全国大会があり、オバマ (Barack Obama) とマケイン (John McCain) が正式な大統領候補に決まりました。このあたりから、私はまたニューヨーク・タイムズを読み始めたのですが、情報が文字だけでなくビデオとしても掲載されており、非常に迫力があることが分かりました。しかも、

ビデオに録画されたものを見るということだけでなく、実況中継も行われていることを知りました。これには驚きました。新聞がテレビと同じ役割を果たしているわけです。

9月26日に、ミシシッピ州のオックスフォードにあるミシシッピ大学で行われた大統領候補同士の討論については、実況中継ではなく、終わってからビデオで見ました。その時点では、まだ実況中継を見ることができるとは知らなかったからです。この討論会は、各党の全国大会とは全く違った雰囲気で行われました。党の全国大会は、いわばお祭りで、数万人を収容できると思われるスタジアムで行われ、参加者は自由に行動できます。これに対して、候補同士の討論会は大学の講堂で行われ、聴衆の数も千人ぐらいではないかと思われました。

参加者には静かに聴くことが要求されており、拍手することすらしないことになっています。司会者が居て、このときには、テレビのニュースのアンカーとしてよく知られている Jim Lehrer という年配の白人が務めました。候補者は左右に置かれた講演台に前に立ったままで話します。司会者は、中央に置かれたデスクを前にして椅子に座って、聴衆と同じように候補者に向き合います。90分にわたる結構長い時間には、いろいろなテーマが取り上げられ、両候補が話したこととそれへの評価は日本のテレビや新聞が伝えたとおりです。

私が感心したのは、ビデオで一部始終を見ることができるだけでなく、候補者と司会者の発言が全て文章になっていることです。ですから、これを印刷しておいて、それを見ながらビデオを見ると、実によく分かるのです。私には、マケインの英語の方が分かりやすく感じられました。

10月2日には、副大統領候補のバイデン (Joseph Biden) とペイリン (Sarah Palin) の討論が、ミズーリ州のセントルイスにあるワシントン大学で行われました。これは、現地時間の午後9時から10時30分まで行われたのですが、日本時間では3日の午前10時から11時30分に当たります。定職に就いている日本人は、この時間帯にニューヨーク・タイムズを見ることはできないでしょうが、私は時間に縛られていないので、この一部を実況中継で見ました。

討論会のスタイルは、大統領候補同士のとくと全く同じで、今回の司会者は Gwen Ifill という黒人女性でした。討論のテーマは、大統領候補同士の場合と余り違わなかったのですが、経験不足が指摘されているペイリンが経験豊富なバイデンに対してどのような戦いができるかが注目されて、7千万人もアメリカ人がテレビ中継を見たと言われています。これ以外に、私のように、ネットで新聞による中継を見た人がかなり居たというわけです。

副大統領候補同士の討論でも、ハッキリした勝ち負けは付かなかったというのが一般の評価のようですが、英語の点では、私には、バイデンの方が分かりやすかったと思います。マケインとバイデンは年齢的に私に近く、つまりシニアな人で、話し方がオバマやペイリンよりもゆっくりとしているせいではないかと思います。オバマはよく準備していたようで、そういう意味では決して分かりにくい英語を話しているわけではないのですが、全般的に若い世代の話し方をしていると思います。これは、ペイリンの方がもっとハッキリしており、女性だということもあって、4人のなかでは

一番分かりにくかったと思います。話されたことを後でプリントして読んでみても、やはりそうでした。ニューヨーク・タイムズの評では、ペイリンの話し方は、ああいう大きな討論会で通常使われる話し方とは異なっており、活発だが単調な話し方 (sing-song lilt) だと書いてありました。sing-song は褒め言葉ではないようです。

このような大きな出来事を直に見ることができ、その気になれば、話されたことを一字一句残らず手に入れることができる状況になっていることには、驚くとともに、日本人の英語世界との今後の付き合い方をもっと真剣に考えないといけないと感じています。生きた英語を習う教材として、ニューヨーク・タイムズは非常に良いと思います。ワシントン・ポストも同じようなサービスを行っています。私はきちんと見てはいませんが、イギリスのタイムズも似たような状況になっているようです。

このように、暫くの間ニューヨーク・タイムズと付き合いただけで、知らなかった英語をかなり覚えました。その中のひとつに、Main Street という言い方があります。Wall Street と対にして使われることが多いのですが、ペイリンは Main Streeter という言い方もしていました。これは、保守的・伝統的な中産階級を指す言葉で、シンクレア・ルイスが1920年に書いた“Main Street”という小説に起源があるそうです。アメリカ人にとっては何でもない言い方なのでしょうが、私は知りませんでした。私が40年以上前に1年間住んだミシガン州の Ann Arbor という小都市には、Main Street という通りがあり、同じような小都市にはよく Main Street があることは知っていましたが、別の意味があることに今回初めて気付きました。英語という言語に精通することの難しさを今更のように感じています。

最後に、副大統領候補同士の討論は1回だけですが、大統領候補同士の討論は、11月4日の投票日まで、更に2回行われることを付け加えておきます。以上。